
怪談話はお好きですか？

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪談話はお好きですか？

【Nコード】

N6598B

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

・美奈子が未亜に押しつけられたのは、「学校七不思議の謎を解け?」。美奈子と水瀬の凸凹コンビの前に現れる不思議な現象の正体は?・「美奈子ちゃんの憂鬱」シリーズ初の長編を収録!

第一話

「オバケが出る？」

バカじゃないかしら。この子。という顔で、美奈子は話しかけてきた相手を見つめ返した。

「だってえ！昨日さ、警備員のおじさんが見たって！」

興奮気味に話しているのは、美奈子と同じ報道部の部員。未亜だ。ただ、彼女の場合、「報道」Ⅱ「ゴシップ」。可愛い外見と裏腹に、校内のこうした話題の生き字引とさえいわれる。好意的に言えば好奇心の固まりみたいな子。関心をもったものにはとことんつきまとう。

だから、こういう話には関心が強い。

「……あのねえ。”幽霊の正体見たり”ってことわざだってある通り、この世界にオバケなんていないのよ。バカバカしい」

「だってえ」

話にのってこないで不満そうに口をとがらせる未亜。美奈子はもうこれ以上つきあいきれないという顔で、視線を手にしていた文庫本に落とした。

「信じてない」

「こ、これで5件目だよ？今月だけで！しかも全部七不思議の場所で！」

”出る”っていう先入観が見せているだけよ。いないものはいないの」

「……じゃあ、証明してよ」

「はあ？」

「いないいいない””っていうならさ。美奈子ちゃん、”いない”って証明してほしいなあ」

絶対下心があるに違いない眼差しをあえて無視して美奈子は言い返そうとして言葉につまった。

確かに、” いるかどうかかわからないもの ” を ” いる ” ということも出来れば ” いない ” と言うことも出来る。

問題は、それをどうやって証明してのけるか。

そういうことだ。

美奈子は、その方法がとっさには思いつかなかった。

そして、未亜は美奈子が、” それ ” が出来ないことを知っていた。

「未亜、あんたが ” いる ” っていうけど、それ、証明できるの？ 出来ないでしょ？ じゃ、私が ” いない ” っていうても証明できなくとも」

「 ” いる ” かもしれないし、 ” いない ” かもしれないよ？ 」

未亜は一気にたたみ込みにかかる。

「？ 」

「つまりい」

未亜は強引に美奈子の手をとって、顔を近づけてきた。

「幽霊話の真相、つきとめてほしいの！！ 」

拒否することを予想していたのだろう。未亜が新聞を美奈子に突きつけてきた。

今日、というか、ついさっき発行されたばかりの校内新聞。

未亜が指さす先の記事は

『次回予告！』

校内で頻発する幽霊目撃談！

明光学園七不思議の謎とは！？

その真相を突き止めるべく、報道部は立ち上がった！

報道部の若きエース1－A桜井美奈子の調査を待て！』

「というわけでよろしく。記事は木曜日のお昼までお願いね（はあと）」

「ちよつとお！」

未亜のあまりの強引さに席を蹴った美奈子だが、返事を聞くまいとする未亜の姿はすでにどこかに消えていた。

翌日。

「一ふうん」

「美奈子ちゃん。できないものはできないって、はっきり言ってしまった方がいいと思いますよ?」

「それが出来れば苦勞しないのよお」

美奈子はクラスメートに経緯を話した後、そう言っアタマを抱えた。

「報道部には、有言実行の鉄則があつてね? こうやって宣言しちゃった以上、調べて報道しなくちゃいけないのよ」

「でも、もうほとんどこの記事で調べがついてる気がするけど」
渡された新聞を、美奈子は興味がないといわんばかりに脇に押しやった。

「未亜が求めているのは、”正体”。何が起きたか”じゃないわ」

「美奈子ちゃんが言ってるわけじゃないのに」

「名前出した以上、私が宣言してる扱いなのよお」

「一で? どうするの?」

「未亜が先生にねじ込んで、今夜、私が校内を見て回ることになつてるの」

「ご苦勞さま」

「ほんとうですねえ」

そう言つて、のんきにお茶を飲んで二人を美奈子は心底恨めしいという顔でにらんだ。

「少しは助けてあげるとかってないの!?」

「助けてほしい?」

クラスメートの一人、どう見ても女の子という外見の男子生徒の言葉に、そう聞かれた美奈子はいにキレた。

「当然でしょ!?! 真っ暗闇の中、女の子一人にそんなことさせる気!?!」

「確かに、それはよくないかも」

もう一人のクラスメートがそう言って小首をかしげた。
芸能界のトップアイドルはそういうちょっとした仕草でも十分絵になった。

「水瀬君、お願いできますか？」

「いいよ。一緒にいってあげる」

「あら？でも」

綾乃は、ふと思いついて一人ごちた。

（うちって、七不思議なんてあったかしら？）

夜 正門前

夜の校舎って、好きな人なんているんだろうか。
いるとしたら、その人は絶対ヘンだ。

用務員室で許可を確認して、下駄箱から校内へ入る。

「……」

騒がしい昼間とうってかわって、静寂が支配する世界。
自分達の足音だけが奇妙に響くだけ。
はつきりいって”怖い”

勢いだけできてしまった美奈子は、未亜の策略に乗ってしまった
自分を真剣に後悔していた。

今度未亜に会ったら、絶対シメる。

それはアカシックレコードに書かれた定められた人類不変の運命
だと美奈子は断定した。

あのバカのせいで

何があるかわからないこんなところに。

誰か悪い人がいるのかもしれないこんな時間に。

犯罪に巻き込まれるかもしれないこんな状況に。

私は連れてこられた。

何かあったらバケででてやる。

そしたら、私は校内のオバケの仲間入り？

ううっ。だめだ。

次々と悪い方向に考えがいつてしまう。

私、もしかしたらー。

怖い目に遭う？

ヒドイ目に遭う？

私は無事で済む？

もしかしたら、

もしかしたらー。

真剣に自分の最後まで覚悟しつつあった美奈子の横から

「ふあああああゝっ」

気の抜けたあくびがして、美奈子は思わずつんのめった。

緊迫感はどこかへ旅立ってしまったらしい。

もう二度と出会えないかもしれない。

あの映画のワンシーンのように、戻ってきてと叫ぶべきかもしれない。

シチュエーションがシチュエーションだけに、戻ってくる素振りをみせたら「やっぱうそ！」って丁重にお断りすべきだろうが。

「……」

「？」

雰囲気壊された美奈子が横にいるクラスメートをにらむ。

「水瀬君。お気楽ね」

「そう？」

背はかなり低い。150センチない。男の子と説明されても、10人中9人は納得しないだろうほどの凄まじくかわいらしい外見。

ボブカットにちかい銀髪の下で、いかにも眠いという顔をしているのが、美奈子に同行している水瀬悠理だ。

これでも魔法騎士だというから、美奈子は世の中が時々信じられなくなる。

けど、今までの経験から、水瀬は外見とは全く裏腹に、腕はかなり立つ。と美奈子は信じている。

肝心の水瀬は、たいした興味もないという顔で言った。

「いない」ことを証明するだけでしょ？ だったら、ただ、校内一周して、”行っただけで見つけることが出来ませんでした” っていうばいだけじゃない」

「そりゃそうだけど」

「遭遇場所、聞いてるんでしょ？ さっさと終わらせよ」

「そうね」

美奈子はポケットからPDAを取りだして未亜からの情報に目を通す。

電子の光が暗闇に慣れた目に奇妙に暖かった。

「まず最初は、音楽室。ピアノが独りでになりだして、壁にかかったベートーベンの目が動き出して―」

「帰る」

きびすを返す水瀬を美奈子はあわてて抱き留めた。

「ち、ちょっと！ 私を置いていかないで！」

「……何、その小学校の七不思議みたいなの」

「し、しょうがないじゃない！ そういう目撃情報があったっていうんだもの！」

「僕たち……バカにされてない？」

「かなりそう思う」

深夜の音楽室一。

真っ暗闇を手にした懷中電灯が弱々しく引き裂く中、美奈子は水瀬の背後に立ち、強く水瀬のウィンドブレーカーの袖を握りしめていた。

転ばないように、水瀬から離れないように、そして、壁のベートーベンの肖像が絶対視界に入らないように気をつけて。

「ね、ねえ、水瀬君？」

「何？」

「なっ、何もいないわよ…ね？ね？」

「うん」

水瀬は、美奈子を見無視するように、教室に入ると、あたりを懷中電灯で照らしながら、教壇の脇に据えられたグランドピアノの前で止まった。

「へ、ヘンなオバケもい、いないし…ね？」

「オバケ、いないって言ってなかった？」

「み、未亜にはそういったわよ？で、でも、こういう所に来ると、ホラ、やっぱり、ね？」

美奈子は、自分でも声が震えているのがわかっていたが、わかったから止められる程、器用ではない。

「ふうん」

美奈子の”オバケなんていない”とは、何のことはない、”オバケなんていなければいい”の略であり、オバケを否定するのは、単なる恐怖の裏返しにすぎない。

それは、読書好きな美奈子が絶対読まないジャンルの本は”怪談話”で、絶対見ない映画のジャンルは”ホラー”だといえはわかるだろう。

美奈子にとって、今の状況は、ホラー映画を立て続けに見させられているの何らかわりはなかった。

「つ、次行きましょ？次！」

握っていた袖をぐっとひっぱるが、水瀬はなぜか動こうとはしなかった。

「み、水瀬君？」

「……」

じっとピアノを見つめていた水瀬が、不意に腕時計に目をやり、つぶやいた。

「あと、8……5……」

「み、水瀬君!？」

「1」

ポロン……

突然、音楽室にピアノの演奏が鳴り響いた。

「一ひっ!」

美奈子は、声にならない悲鳴を上げてその場にへたり込んでしまった。

音楽室に鳴り響くピアノの音は、どこかもの悲しく、そして陰鬱。耳をふさいでも聞こえてくる音に、美奈子の恐怖感はいやでも刺激される。

「大丈夫？」

懐中電灯の明かりに照らされて、美奈子はようやく我にかえることが出来た。

「どっ、どういうこと?これって」

「簡単」

そういつて、水瀬はピアノの端を指さした。

「え?」

ピアノの端にぼんやりと浮かび上がるのは、時計と曲名。

「くわしくないけど、時間がくると自動的に演奏する機能がつい

たピアノだから、誰かがイタズラしていたんじゃない？」

” 停止 ” ボタンを押すと、音楽室は入ってきた時と同じ、静寂に包まれた世界に戻った。

「じ、じゃあ、ベートーベンは」

「光の加減で目が動くように見えるだけだよ。ほら」

水瀬が懐中電灯で照らし出した先には、ベートーベンの肖像画があった。

確かに、光の当たりかたで、目線がずれるように見える。

「結構、単純なオチなんだけどね」

水瀬は、美奈子が見ていると思って、ベートーベンの肖像画をから視線を離さず、懐中電灯を当てる角度を変えた。

美奈子自身は視線に入っていない。

「みなせくん」

「何？」

「あのさ」

感情を忘れたような、平坦な声色に、この時、水瀬は気づかなかった。

「うん」

「壁から女の人が出てくるってのも、光の加減？」

「え？」

振り返った水瀬の視線の先には、何故か口元を袖で覆う、凄まじい形相の女性がいた。

そして、ありえないことに、その足は宙に浮いていた。

第二話

美奈子は、目の前の現実を、ただ、呆然として見つめるしかなかった。

いや、目の前の出来事が、「現実」か「虚実」か、その判断が出来ずにいた。

という方が正しいだろう。

人が壁から出てきて、しかもその足は宙に浮いている。

そんなことはあり得ない。

でも、目の前のこの人は？

こんなのが現実なの？

それとも、ワタシ、夢でも見ているの？

「桜井さん！」

水瀬が美奈子を抱えるようにして床に伏せさせるのとはほぼ同じタイミングで美奈子の頭があった場所を、何かが凄まじいスピードで突き抜けていった。

水瀬の行動が少しでも遅れていたら、美奈子の即死は避けられなかったろう。

ガガンッ！！

鈍い音がして、何かが壁に突き刺さる。

「！！」

水瀬が顔を上げた時、女の姿は消えていた。

「大丈夫？」

しばらくして、この部屋から女の気配が完全に消えていると判断した水瀬が、美奈子に声をかけた。

水瀬に抱きかかえられたままの美奈子は、何故か顔を真っ赤にしてうつむいたままだ。

そして、体は小刻みに震えている。

「ケガしたの？怖かったの？」

「……」

「桜井さん……えっと、とりあえず立てる？」
ぐいっ。

「きゃん！」

「？」

抱えるようにして立ち上がった途端、突然、美奈子がへんな声をあげた。

「み、水瀬君……」

「へ？」

「て、……手を離して！」

美奈子が赤面している理由はなんでもない（年頃の女の子にとっては大問題だが）

水瀬が美奈子の胸をわしづかみにしていたから。

ただそれだけ。

だが、水瀬はそのことに全く気づいていない。

ただ、抱えている美奈子からの「手を離して」という言葉のみに反応した。

「え？はっ、はい」

「一へっ？」

ほとんど水瀬にかかえられていたのに近い状態の美奈子は、一瞬、宙に浮いた後、重力に身を任せ、そして……。

ビタンッ！！

いい音がして、美奈子は顔面から床に落ちた。

「……」

「あ」Σ（〇㇏〇＝

呆然とする水瀬。

「……」

美奈子はうつぶせの状態のまま動かない。

「さ、桜井さん？（^| ^;）」

「……」

無言で顔に手をやる美奈子。その表情はうつぶせなので見えないものの、水瀬の目にはツノが生えてみえた。

「あ、あの、桜井さん？これは事故であって、話せばわかるって
いうか」

「……」

（（（（（（（；。㇏。）（（（（（（（ガクガクブルブル 状態
の水瀬は、必死に弁明しながらおもわず後ずさりしていた。

「決して、故意だったというわけではなく、もしもし桜井さん、
聞こえて」

「……」

TVから抜け出した○子のごとく立ち上がった美奈子は、無言で
水瀬の胸ぐらをつかみー。

○田剛直伝と言われる美奈子のめりこみパンチが水瀬の顔面に炸
裂してからの数分間、音楽室には水瀬の悲鳴がこだまし続けたとい

う。

「ほ、ホントに桜井さん、一般人？」

凄惨な私刑の後、床に倒れ、あまつさえ頭を桜井に踏みつけられている水瀬。

騎士、いや、魔法騎士としてのメンツもへったくれない。

常人の数十倍の身体能力を持つ騎士が一般の運動音痴の女の子にボコられるなど、あり得ない話だ。

「反省してるの！？キミは！？」

美奈子が思い切り体重をつま先にかけてたので、水瀬の頭蓋骨が持ち主と一緒に悲鳴を上げる。

「イタイイタイ！（＜―＞）桜井さん重いやめて！」

「重いはやけい！」

美奈子はいいに水瀬の頭に乘せた片足だけで立った。

「いたー！ー！ーい！！」 たまらずに悲鳴を上げる水瀬。

「反省してるのかって聞いているの！」

「してます！海より深く！心の底からあ！」

「人の胸までつかんで！」

「気づかなかったただけだもん！」

「それって、私の胸が小さいってこと！？」

「そうともいうかも……」

—美奈子の私刑再開。凄惨すぎるため自主規制に基づき削除—

「今度やったら、瀬戸さんに言いつけるわよ！？」

「うううっ……ごめんなさいごめんなさい。もうしません。絶対、もうしませんから、そればかりは……」

「—まったく」

水瀬を殴り続けたために砕けてもさらに殴り続けたため、脚だけ

になった椅子の残骸を放り投げると、美奈子はその場にへたり込んだ。

水瀬君のことはいい。

お昼一ヶ月に、高級ホテルのランチ&ディナー映画鑑賞付き50回を賠償としてせしめたから。

取りあえず、目の前で泣いているこの子のことは無視しよう。

問題は、あの女の人だ。

あの女の方は、確かに存在していた。

現実の存在だった。

あり得ないけど、あり得た話。

目の前で、たった今あった、本当の話。

その証拠に一。

「……」

美奈子は、水瀬の襟首を掴んで立ち上がると、そのまま水瀬を引きずりつつ壁へむかって歩き出した。

壁には、何かが刺さっている。

「……かんざし？」

そっと指で突いてみる。

たしかに本物だ。

飾り気のない朱塗りのかんざしが二本。

「なんで……」

「狙いは間違いなく、桜井さんだった」

不意に水瀬が言った。

さっきまでの死にかけ状態はどこへやら、普段通りの水瀬だ。

美奈子の攻撃は、実は全く水瀬にダメージを与えていない。

だが、美奈子にはそれに気づく余裕はなかった。

狙う？

私を？

どうして？

「ど、どういうこと？わ、ワタシ、誰かに恨まれてなんて」

「理由はなんとなくわかるけど、でも、でもね」

水瀬は立ち上がると、かんざしを壁から引き抜いて懷にしまいこんでから、美奈子に言った。

「間違いなく、あの女の人、桜井さんを殺そうとしていた」

「えっ？」

美奈子には、言葉の意味がわからなかった。

「殺そうとしていた…って、どういうこと？」

「言葉の通り」

水瀬は床に転がっていた懐中電灯を掴むと、音楽室から出ようとして、美奈子に振り返った。

「桜井さん、次はどこ？」

「ち、ちよっと！質問に答えて！」

「だから」

「私が何したっていうの！？そ、そりゃちよっと、友達に宿題見せなかったりとか、借りてたCD返しそこねたことはあっても、そこまで恨まれることなんて、私、何一つ」

「そう、だね」

先ほどのあの私刑はなんだったんだ？という複雑な思いに
かれ、水瀬は黙った。

「確かに、桜井さんの方に、覚えはないかもしれない。でも」

「でも？でも何？私、私本当に！」

「向こうには覚えがあるんだ。きっと。だから」

水瀬は桜井の袖を掴んだ。

「行こう。怪談話のナゾを解けば、わかるはずだよ」

水瀬にひっぱられる形で音楽室を後にする美奈子。

「……」

懐中電灯の灯りを頼りに真っ暗な廊下を進む水瀬の後ろ姿を見つ
めながら、美奈子はさっきの水瀬の言葉を頭の中で反芻していた。

『向こうには覚えがある』

……私にはない。少なくとも、オバケに恨まれるなんて。

『行こう。怪談話のナゾを解けば、わかるはずだよ』

……そうかもしれない。怪談話の謎を解くって、それで私はここ
に来ている。

怪談話に関係があるのかもしれない。

でも、このセリフどこかで――。

廊下を進む中、不意に美奈子が吹き出した。

「ど、どうしたの？」

「ね、水瀬君」

「何？」

「さっきのセリフ、先週のシャーロック・ポアロでいってなかつ
た？」

「うゝ」立ち止まり、気まずそうに振り返る水瀬は、ちらりと美
奈子を見ると、恥ずかしそうに前を向いて、さっきより早足で歩き
始めた。

どうやら凶星らしい。

「ど、どうせボクはボキャブラリーがすくないですよおだ！」
(当てずっぽうだったんだけど、ホントだったんだ)

美奈子は瓢箪から駒が出たことに驚きながらも、
水瀬君らしい。

と、不思議な安心感を覚えていた。

かっこいいセリフは、かわいい水瀬君には似合わない。

でも、こういうとき、精一杯背伸びするのも、また水瀬君だ。

美奈子にとって、それこそが水瀬だったから。

やっぱり来るんじゃないかった。

幽霊の目撃場所に立ち入るたびに美奈子は心底後悔するハメになった。
った。

「きやあああああっ!!」

「がんばってねー」

「薄情者おお！」

C棟の階段では、突然階段が真っ平らになった。

登り終えようとしていた美奈子は、空中に浮いた水瀬に見守られながら悲鳴と共に踊り場まで滑り落ち、踊り場に置かれた段ボールの山にパンツ丸出し状態でめり込んだ。

体育用具室では、バレーボールがもう一步で顔面を直撃するところだった。

水瀬が突き飛ばして直撃は避けられたが、突っ込んだ先は腐ったようなにおいのするマットの中だった。

家庭科室では、どこからか飛んできた針と糸に襲われ、水瀬の目の前でシャツのボタンとブラジャーのホックを一瞬のうちに外された。

生まれて初めて男に肌をさらした美奈子だが……。その一大事を、「風邪引くよ？」の一言で切り捨てられた。完全に理性を失ってハサミを振り回す美奈子に追いかけるように水瀬は次の現場へと向かった。

部室棟では

「へえ」

突然、水瀬が桜井にヘルメットをかぶらせた。

「何？」

「ううん。いいコントロールしてるから」

「へ？」

ガンッ

鈍い音がした途端、美奈子の瞼の裏で星が飛んだ。

ガランッという音がして、美奈子の頭から何かが落ちた。

タライ。

そう。ユニフォームを洗うのに使う金属製の、あのタライだ。

「……そういえば、今日、七夕だったね」

「ほ、星が巡り会ったわよ。瞼の裏で」

「よかったね」

美奈子のめりこみパンチ、本日二度目の炸裂。

「……で、次が美術室の」

プルップルッ

美奈子の携帯電話が鳴り出した。

未亜からだった。

美奈子は、携帯片手でなにかあったことを恐れ、ハンズフリーで

未亜相手に怒りのガチンコ会話を開始した。

『やっほー！美奈子ちゃん。元気い？』

緊迫感のない未亜の声に美奈子は思わず脱力する。

「なわけないでしょ!？あんた、私がどんなメにー」

『え？ええっ？』

「痛いし恥ずかしいし、本当にヒドイ目にあっただから!？」

『へえっ』

含むところがある未亜の声色に、美奈子は自然と警戒した。

「な、なによ？本当よ!？本当にー」

『水瀬君、結構キチクだったんだあ』

「はあ？」

『だってさ。真っ暗な中でオトコとオンナがいるわけだし、ス
ることは一つだよねえ』

「なっ、何いってー」

未亜が何をいいたいのか、美奈子にもわかった。

『美奈子ちゃん、初めてだったんでしょ？それなのに、水瀬君ひ
どいよねえ』

一瞬、そういう場面を想像してしまった美奈子の顔が首まで赤く
なった。

『ねねね、美奈子ちゃん、そのコト、後でくわしくおしえてね

(はーと)』

「何いってるのよ未亜! いったい誰のせいでーきやつ!」

ガッンッ

突然、美奈子は後ろにおし倒された。

空中を舞う中で、美奈子は自分が立っていた場所の真上にあった
防火シャッターがあり得ないスピードで降りてくるのを、たしかに
見た。

「くうっ!」

背中をうったのでマトモに息が出来ない。

「あっ……はあはあ……み、みなせ……くん」

苦しい息の中、周囲を確認する。

美奈子は覆い被さっている水瀬に抱きしめられる形で床に倒れていた。

音楽室の時ともそうだが、今日はよく押し倒される日だ。

「み、水瀬君、いっ痛い」

『お、おお!!!!?』

「がまんして。すぐよくなるから」

『お、おおおおおおつつ!!!!?』

なぜか大興奮の未亜の声。

しかし、それを一々気にしていられる状況に、美奈子はなかった。というか、耳に付けたスピーカーが押し倒されたショックで外れたため、美奈子の耳にはほとんど聞こえていなかった。

「はあ……はあ……」

ようやく呼吸が戻る。

「大丈夫?」

「うん。大丈夫。もう痛くない」

「じゃ、いくよ」

立ち上がって美奈子の手をとる水瀬。

「うん」

美奈子は安堵の表情を浮かべて水瀬の手を取り、立ち上がった。

「ありがとう。水瀬君、やさしいんだ」

『きゃーっ!!』、（。▽。）ノ

「でも、どうする?この防火扉。こじ開けるしかないかな」

「だ、だめよ。壊れちゃう!」

「でも、そうするしかないよ。防火扉に閉じこめられている」

「え？」

見ると、背後の防火シャッターも降りたままだ。つまり、二人とも閉じこめられていた。

「で、でも、そんな……壊れちゃう！」

「このまま朝を待つ？」

「そ、そんな！そんなに待てない！」

「じゃ。そういうこと」

「じ、じゃあ、水瀬君がしたければ、いいよ？」

美奈子は、とっさに責任を水瀬に押しつけた。意外と計算高いのが美奈子の一面だ。

「……あんまり、ひどくしないでね」

取材中に自分は巻き込まれただけだ。これは不可抗力だ。

そう思っても、明日、破壊された防火シャッターをみた先生達が何というか、あまり想像したくなかった。

水瀬は防火シャッターを掴むと、片手で無造作に引き上げた。

「ひゃっ！」

バキッ

鋭い金属音がして、防火シャッターはすだれのようにぐしやぐしやになりながら、人間が通れるまでに持ち上がった。

人間数人がかりでも難しい力業を片手でやってのける。

これも騎士の力のうちだ。

「みつ、水瀬君、す、すごい」

「君ほどじゃないよ。さ、ここが最後だね」

防火シャッターをぐり抜けた先には扉があった。

扉につけられたプレートには、「美術室」と書かれていた。

第三話

美術室のドアを開けた途端、むっとする油絵の具の匂いに、美奈子は一瞬、息を止めた。

「ここが最後。絵の中から音楽が聞こえるって」

「博雅君が知ったら喜んだらうね」

「まさか」

水瀬が懐中電灯で室内を照らす。

デッサン用の彫像や描きかけのキャンパスが無造作に置かれる室内は、やはり昼間とは別の世界であることを示すかのようだった。

「怖い？」

「いいえ！」

美奈子は語意を強めて断言した。

「もうここまで来た以上、なんでも来いって感じだわ！」

「……ヤケクソっていうんじゃない？　そういうの」

「うるさい！　そうとでも考えなければやってられないじゃない！」

「ふうん」

水瀬は、半ば呆れたような顔で美奈子を見た後、言った。

「じゃ、もう時間も時間だから、終わりにしようよ」

「そうね。音楽は聞こえないし、あの女の人も出てこない。結局、

原因は不明！　これでおしまい！！　、（。▽。）ノ　」

「時々、短絡的になるね。桜井さんって」

「いいのいいの！　さ、帰りましょ！」

ぐいっと、水瀬の袖を掴む美奈子だが、水瀬はなぜか、そこから動こうとはしなかった。

「まだ終わってないよ？」

「えっ？」

突然、水瀬が誰もいないはずの美術室に向けて語りかけた。

「出てきて。聞こえているんでしょ？」

「水瀬君？」

「力になれるかもしれない。だから、出てきて」

待つこと数分。

美術室に変化はない。

「ほら、やっぱり何もー」

美奈子が何かをごまかすように水瀬に語りかけたその時だ。

あの女が美術室の奥に通じるドアの前に立っていた。

相変わらず、口元を袖で隠しているが、今までのような恨めしさではなく、何か、すがろうとしているかのような、そんな顔だった。

「ひっ！」

美奈子にそんなことがわかるわけではない。

オバケはあくまでオバケであって、すがろうが敵対しようが、とにかく怖いものなのだ。

だから、この女の突然の出現に、腰を抜かせてはいつくばるようにして逃げ出そうとしても無理はない。

だが、美奈子の襟首を、水瀬が無造作に掴む。

「報道に携わるつもりなら、ここは逃げる所じゃないでしょ！」

「そっ、そんなこと言っちゃって！」

ジタバタ暴れるが、水瀬に掴まれた襟首は全く動かない。

「オバケにあったら普通は逃げるって相場がー」

「この時間、相場は開いてない」

「時間外取引使ってるのよ！」

「桜井さん、わけわかんない」

「わーんっ!! 怖いものはこわいのよお!」

もう半泣きの美奈子を見無視して、水瀬が再び語り出した。

「君の本体に案内して。袖に隠した口元、何かあったんでしょ?」

「……」

水瀬を見つめる女の目に大粒の涙がこぼれた。

「他言はしないよ。だから、案内して」

「……」

フッ。

女が、ドアに吸い込まれるようにして消えた。

「いくよ」

水瀬は美奈子を引きずりながらドアに向かった。

「み、水瀬君、一体、何? あんなの? あのオバケ!」

美奈子は、引きずられることにおかまいなしに水瀬に尋ねた。

「オバケじゃない」

「へ?」

「九十九神だよ」

「つくも……?」

「モノが100年経つとなるってアレ」

「結局オバケじゃない!」

「精霊っていった方が正しいと思う」

「私の中じゃ、オバケよオバケ!」

「じゃあ、百歩譲ってそうだとっても、助けてあげなくちゃ」

「じ、除霊するってこと?」

「そんなもったいないマネしないよ」

「もったいない……?」

ドアにかかったプレートには「備品室」とある。

「桜井さん。このドアの向こうって何があるの?」

「美術室の備品とか、いろんな作品とか保存してあるはずだけど」
「ふうん……」

キィ……ッ

ノブを開ける。

室内は様々な道具や作品で満足な足の踏み場もない状態。
壁には無数の絵が掲げられ、飾ることが出来なかった絵がラック
や床に山積みになっていた。

「？」

水瀬は、壁にぎっちりかがけられている中で、一枚分だけ、絵が
掲げられておらず、壁が丸出しになっている部分があることに気づ
いた。

そして、すぐ先に、あの女が立っていた。

「どれ？」

女は、口元を覆っていない方の手で、額縁が山積みになっている
箇所を指さした。

水瀬が黙って何枚かの額縁をめくっていく。

「あっ」

3枚目でその手が止まった。

「……なる、ほど、ね」

心底関心したという顔の水瀬は、女の方に向き直ると、言った。

「わかった。知り合いに修復してもらおう。数日、辛抱してもらえ
る？」

コクコクコク

女は何度も頷くと、不意に消えた。

「あ、あの……」

「これはヒドイよ」

懐中電灯に照らし出されたのは、一枚の絵だった。

「……綺麗」

美奈子も思わず嘆息したほどの見事な水彩画。

胡弓を奏でながら椅子に腰掛けている和服姿の女性。

なんでもない構図だが、胡弓の音色に耳を傾ける女性の楽しいな表情といい、しぐさといい、見る者に、今にも胡弓の音色が響いてきて当たり前と感じさせる、そんな不思議な絵だった。

しかし――。

問題は女性の顔。

誰かがマジックで彼女の顔に悪戯書きをしたらしい。
色白の美しい彼女の顔には、

ヒゲ

が書かれていた。

美奈子は、これで理解出来た。

なぜ、あの女の人が、袖で顔を隠していたのか。

このヒゲを誰にも見られなくなかったから。

涙をみせ、この絵まで案内したのも、彼女がこのヒゲを何とかして欲しかったからにちがいない。

今になれば、彼女が憎悪に燃える心も、美奈子にはわかる。

むしろ、そう感じて当然だとさえ、思えてならなかった。

「ひどい。一体誰が！」

悪戯の限度を超えている！

こんなことは許されるべきではない！

まるで絵の中の女を代弁するかのようになり、美奈子は声を荒げた。

「絶対、先生に報告して――」

「それ、困るんだけど……ほら、そこ」
対して、あくまで冷静な水瀬は、絵の中の女の胸元を指さした。
美奈子が見る先にあったもの、
それは一。

「なあっ!!?? Σ (OДO=」

美奈子は、一瞬、我が目を疑い、しばらく呆然とした後、突然、
わき上がる怒りに髪を逆立てた。
というか、完全にキレた。

「桜井さん、落ち着いて!」

「放して!せめて一刺!」

テーブルの上におかれたナイフを掴んで美術室から飛び出そうと
していた美奈子を、水瀬が羽交い締めにして止めていた。

「あのバカ、絶対、ブツ殺してやるんだからあ!」

女の胸元に書かれていたのはただ一言。

「未亜ちゃん参上! (はあと)」

第四話

明光学園

C棟廊下

「—ありがとうございます」

廊下ですれ違った先生に丁寧な挨拶する美奈子の姿があった。

昨日、ナイフ片手に未亜を殺すとわめいていた人物と同一人物とは思えないほどの丁寧さだった。

「終わった？」

移動教室に向かう途中、美奈子を見かけた水瀬が声をかける。

「ええ」

美奈子は挨拶もそこそこで水瀬と一緒に歩き出す。

「でも、どういう心境の変化？」

「何が？」

「未亜ちゃん相手にあれほど怒っていたのに」

「よくよく考えたんだけどね。未亜を殺すのは、あいつのシツポを掴んでからでいいのよ」

「し、しっぽ？」

「もう、大体の所は掴んだから、後は明日のおたのしみってところね。そのあとでじつくりと。うふっ。うふふふっ」

指をポキポキいわせながらほほえむ美奈子の顔は悪意に満ちあふれている。

完全に未亜をどうにかするつもりでいることは、水瀬にも明らかだった。

「殺さないでね……」

「わかんない」

翌日
明光学園
食堂

300人収容可能な大食堂の一角に、美奈子と水瀬、そして綾乃の姿があった。

美奈子の様子がおかしいと聞いた綾乃が、水瀬にお願いした結果だった。

なお、この場合のお願い、とは、一般には脅迫とか恐喝とか強請とかいわれる部類のものだと、少なくとも水瀬はそう考えている。

『なるべく人目について、美奈子ちゃんが問題を起こさない所を選んでください。水瀬君は、それでも美奈子ちゃんがコトに及ぶようでしたら、絶対に止めてくださいね？いいですか？失敗したら許しませんからね？』

どうしろっていうんだろう。と疑問に思いつつ、水瀬はただ、綾乃のお仕置きが怖い一心からこの場を必死にお膳立てすることになったのだ。

つくづく、水瀬が綾乃の尻に敷かれているかよくわかるというものだ……合掌。

「やつほお！美奈子ちゃん！」

「きゃっ！」

行き交う生徒達の合間を縫うようにして突然、未亜が美奈子に背後から抱きついた。女の子二人が抱き合う姿に、何人もの生徒が足を止め、美奈子達に視線が集中する。

「み、未亜、放しなさいもう！」

「ねねねねね、美奈子ちゃん、原稿は？原稿！」

「はいこれ」

美奈子がバックから取りだしたのは、一冊のファイル。

「うっわぁ！さんきゅ！どれどれ」

ファイルを開いた未亜が、なぜか一瞬のうちに固まる。

「いい記事でしょお？どっかの誰かの悪行の数々、まとめて公にしたら、停学程度じゃすまないわよねえ」

声のトーンを落とした美奈子の目は、完全に未亜をねめつけていた。

「おかしいと思ったのよ最初から。学園で七不思議なんて聞いたことないし、実際、調べても先輩達どころか先生達すら知らない。誰も知らない七不思議なんて、そんな七不思議がある？しかも未亜、この七不思議って、あんたが中学時代に記事にした内容と同一じゃない！」

「ちえっ。やっぱり、安易だったかなあ」

バツが悪そうな顔で舌打ちする未亜。

「未亜ちゃん、人をだますのはよくないことですよ？」

綾乃が諭すように言った。

「でも、本当のことを正直に言ったら、きっと美奈子ちゃんだって」

「ホント!？」

「ホ・ン・トのことだったらね（怒殺）」

美奈子の殺気だった視線に、未亜は軽く引いた。

「あ、あのね」

覚悟を決めたらしい。

なぜか、ちらりと水瀬の方を向いて、未亜は言った。

「み、水瀬君の協力が、どうしても必要だったの」

「はぁ!？」

「聞いて」

未亜の目を見た美奈子は黙った。

話題を追いかける時に見せる好奇心に隠れた未亜の心がそこにあ

った。

何があっても、絶対に何一つ諦めない真摯さが一。

ある日の放課後

美術室前

「はいっ！今日の学校探検は、美術室にやってきました！」
マイク片手の未亜は、彼女にしか見えないカメラ相手に語り出した。

うん。タイミングばっちり！

突撃レポーター志望の未亜は、放課後、人気の少ないところで、こっそりとこんな遊び、というか、練習をしていた。

レポーターの志望者は女子部員の半数を超える。

みんなきれいでかわいくて、未亜よりずっと記事をきれいに読み上げることが出来る。

対して未亜は記事を覚えられず、ただ悪戯に棒読みしてしまうところか、突然、アドリブでまじめな記事をお笑いにしてしまう。

報道関係への就職を志望する生徒達への教育も兼ねる部に入部した後の適正試験で、未亜がアナウンサー養成課程から一発で除外されたのは、そのせいだ。

第一志望のレポーターでも、適切に記事を棒読みすることに力を入れる部の方針から外れる未亜の存在は浮いていた。

未亜は練習の度に思う。

みんな、記事を覚えているだけじゃない。

でも、私は他の誰より現場での判断力やアドリブでは絶対負けない。

それが、未亜の自慢、いや、たった一つの取り柄だ。

容貌でかなわない。

記事読み上げでかなわない。

ならー

それならー

私は私の持ち味を活かした報道をすればいい。
記事と共に、「私」を売り込めばいい。

未亜が、他人が見たらヘンに思われるようなことをしているのも、
すべてはそんな一念からだった。

未亜は見えないカメラめがけて続ける。

「美術室の奥、この扉の向こうには、一体何があるのでしょうか
！？楽しみですねぇ」

うーん。セリフが陳腐だなあ。もっとこう、関心を引くような言
葉じゃないとダメだね。考えなくちゃ。

「今のセリフ、陳腐すぎ」

胸元のマイクにそっとつぶやくと、ポケットからカギを取りだす。
美術の先生からくすねた合い鍵だ。

「それじゃ、入りまあす！」

元氣よくドアを開け、用具室に入る未亜。

うん。カメラが先に入って、仰角のアングルで撮ればいい絵にな
るだろう。

私は元氣が売り物だから。

未亜がこの部屋に入ったのは、実はこの時が初めてだった。

「うっわあ」

壁一面の絵。

どんなに努力しても、未亜には一生描くことが出来ないだろう見事な絵が掲げられている。

風景画、人物画、抽象画。

夕日に照らし出された壁一面の絵が、突然のちん入者に驚いているように見えた。

いけないいけない。レポーターが呆然としてはいけない。

「はいっ、スタジオの桜井さん、聞こえますかあ！？絵です。一面の絵です！美術部顧問の雨宮先生が絵画泥棒だったというのは、どうやら、本当だったようです！これはスクープです！」

ここでカメラが室内を撮って、スタジオでコメントっと。
それにしても。

「キレイだなあ」

壁の絵達に、未亜は視線を向け、正直な感想を漏らす。

元来、未亜は美しいモノは嫌いではない。外見がにぎやかだから、誰も想像できないだろうが、未亜の趣味の一つには美術館巡りがしつかりと入っている。

最初の父親が絵描きだったことも影響しているかもしれない。

夕焼けの色に染まる中、誰に見られるわけでもなく存在する絵画達――。

ビーン

「にゃ？」

あれ？今、弦の音がしたような？

ビーン

まただ。

あたりを見回すけど、誰もいない。

ドアはしまっているから、どこから入ってるはずはないんだけどー。

きよろきよるとあたりを見回すけど、誰もいるはずがない。

ビィン

またした。

そっか、これは空耳だ！

未亜は無理にそう判断すると、あたりを見回し、不意に、一枚の絵に行きついた。

和服姿の女性が、弦楽器（名前は知らない）を奏でている絵。

きつと有名な人が描いたんだろう。すごく上手。

「にゃはぁ。キミだなぁ。びっくりさせて」

未亜以外、誰もいない部屋、それはすなわち、そこにいる未亜の世界だった。だから、未亜が何をしてても許される部屋ー。

だから、私がなにしても許される。

この部屋の支配者は私なんだから。

どんな悪戯だって。

誰に出もある、そんな心理の末のことだ。

「驚かせて。いけない子だなぁ。キミは」

うんうん。と、腕をキミながら頷く未亜は、不意にポケットからマジックを取り出した。

「だから、お・し・お・き」

カキカキ

うん。なかなか上手だ。

こんな綺麗な女性でプロペラひげを生やした人なんていやしない。
うん。目立っていい。ついでに面白い。

「センスにバレないように隠して、と」

壁から絵を外して、平積みになっている額縁の山に隠す。

「おヒゲの美人さんはここに隠れましょう」

未亜がそう言って笑いながらマジックのキャップをしめた時

きやあああああつ

女の人の悲鳴がした。

しかも、すぐ近く

「へ？」

あたりに人気はなし。

いるのは私だけ。

なんだろう。

背筋が寒い。

それに、誰かに見られている。

カンの良さは自慢できる未亜は、この部屋が突然、危険なことを
感じていた。

もう一度、あたりを見回して、未亜は愕然とした。

見られている。

見ているのは一。

絵だ。

絵からすごい視線を感じる。

だめ。

この部屋は危険すぎる。

未亜は、遺留品がないことを確かめると、一目散に部屋を飛び出した。

誰かが、後をついてくるのを感じながら。

第五話

「あんたよく無事で」

「うん。水瀬君の護符が効いたみたい」

冷たい視線を投げかける美奈子と、素知らぬ顔でとぼける水瀬。

「それじゃ、未亜ちゃん、その「何か」をどうにかさせるために、水瀬君の力を借りたかったってことですか？」

「そゆこと」

「私はなんだったのよ！」

美奈子が席を立てて未亜の胸ぐらを掴んだ。

「あんた、私がどんな目にあったかわかって！」

「うん。このMDに録音してきたよ」

「こ、このー！」

我慢できず、手を挙げかけた美奈子の腕を水瀬が掴んだ。

「桜井さんを巻き込むことで、本当は、自分が犯人だってことをごまかすつもりだったんでしょ？」

「さっすが水瀬君！ご明察！」美奈子の手から逃れた未亜は、拍手混じりで水瀬に言った。

「水瀬君に私が直接言ったら、美奈子ちゃんが疑問を持つのはもう明白だし。でさ。こっちからも質問だけど、結局、何だったの？」

「あの絵、描いた人に余程思い入れがあったんだろうね。その想いが絵そのものに生命を与えた。文字通りの九十九神としてのね」
水瀬が後を引き継ぐように口を開いた。

「未亜ちゃんが聞いた弦の音は彼女の持つ胡弓のそれだよ。本人としては挨拶のつもりだったのに、未亜ちゃんはそれにあんないたずらで答えた。だから、彼女は怒ったの。昨日一晩中恨み言聞かされたよ」

「あ、あの絵って」

「公には廃棄処分。実際には僕が引き取った」

「いいの？」

「桜井さんの言うところのオバケが憑いた絵があるなんて、学校としても体面がわるいでしょ？だからぼくが引き取った。彼女との約束通り、数日で直るはずだよ」

「じゃあ、これで一段落だね！？」

「全然、終わってない！」

美奈子が未だ納得できないという顔で未亜にかみついた。

「私は！？私がなんで殺されかかって、あんなは一もがっ！」

突然、水瀬が美奈子の口を手で塞ぐ。

あせる水瀬の視線の先には、きよとした顔の綾乃がいた。

「それも簡単」

水瀬は話題をそらせるために急いで説明を始めた。

「桜井さんを、未亜ちゃんだと勘違いしただけ。桜井さんが襲われた時、いつも未亜ちゃんの名前を口にしていた時だった」

「で、でも」

美奈子は、なぜか納得できない。何かが心のどこかに引っかかっているようですっきりしないのだ。

「ごめんねえ。美奈子ちゃん」

未亜が不意に頭を下げた。

「せっかく協力してくれるんだったら、美奈子ちゃんにも美味しいうちか、キモチいいチャンスあげてもいいやって思ったから、結構、考えたんだよお」

「はあ！？」

未亜以外の全員がきよとした顔で未亜を見返した。

「な、なによ未亜、その気持ちいいって」

「にゃあ？」

未亜は、不意に意地の悪い眼差しで、美奈子を見つめた。

「そっかあ、痛いだけだったのかなあ？」

美奈子は、不意にあの夜の未亜との電話を思い出し、赤面した。

> 「なわけないでしょ! ? あんた、私がどんなメに―」

> 『え? ええっ? 』

> 「痛いし恥ずかしいし、本当にヒドイ目にあっただから! ?」

> 『へえゝっ』

> 「な、なによ? 本当よ! ? 本当に―」

> 『水瀬君、結構キチクだったんだあ』

> 「はあ?」

> 『だってさ。真っ暗な中でオトコとオンナがいるわけだし、スることは一つだよねえ』

> 「なっ、何いって―」

> 『美奈子ちゃん、初めてだったんでしょ? それなのに、水瀬君ひどいよねえ』

「なっ、なっ」

「通話内容はそのMDに記録されているから、後で聞いてねん。せっかくの記念なんだから(はあと)」

そういうやいなや、未亜は全力疾走で食堂から逃げ出した。

「待ちなさい未亜! 今度こそ絶対、絶対許さないんだからあ!」

台風のような騒ぎを見送りつつ、水瀬はため息をついた。

「ホント、仲がいいよねえ」

ぬるくなりかけた紅茶に手を伸ばしかけて、思わず体を硬くする。横にいる綾乃が、なぜか怒っているのが目に入ったから。しかも、凄まじく。

((((((; 。 D 。)))))) ガクガクブルブル

「せ、せとさん？ね、ど、どうしたの？」

耳に付けたイヤホンの先には、未亜のMDプレイヤーがあった。

綾乃の耳に入っている音声は、あの夜の美奈子の言葉だけを記録したものだった。

しかし、どう聞いても、未亜の言葉を裏付けるのに十分なものだった。

たとえば、それが未亜の編集したものだったとしても。

<「きゃっ！……くうっ！……あっ……はあはあ……み、みなせ……くん……み、水瀬君、いっ痛い」

<「がまんして。すぐよくなるから」

<「はあ……はあ……」

<「大丈夫？」

<「うん。大丈夫。もう痛くない」

<「じゃ、いくよ」

<「うん」

<「ありがとう。水瀬君、やさしいんだ」

<「で、でも、そんな……壊れちゃう！……そ、そんな！そんなに待てない！……じ、じゃあ、水瀬君がしたければ、いいよ？……あんまり、ひどくしないでね」

なんだからわからないけど、逃げた方がいいらしい。

そう判断した水瀬だったが一。

瀬戸綾乃が、泣き叫ぶ水瀬を引きずったまま食堂を後にしたのは、複数の生徒達が目撃している所だった。

午後の授業全てに水瀬は欠席。

水瀬にお花畑の先の川を見せた綾乃は、美奈子の必死の説得を経て、MDの内容が濡れ衣であることを納得した途端、水瀬がさぼっ

ていると別な意味で怒り出したという。

何があったかは、綾乃がすっかり忘れ、水瀬が語りたがらないため、様々な憶測を呼びつつ、いつしか忘れられていった。

放課後

第一発見者は生活指導教諭。

水瀬は体育館裏手で凄惨なリンチを受けたらしい。

『教師生活25年、こんなひどいケガはみたことがない』という生活指導教諭の言葉が、水瀬の被害の全てを物語っていた。

強いて表現すれば「ほとんどミンチ」状態で発見された水瀬は、3日間、学校を休んだ。

その意図が、ケガのせいなのか、綾乃を恐れてかは定かではない。多分、後者だろう。

月ヶ瀬神社

放課後

夕暮れの暑さはまた格別だった。

美奈子は、お見舞いのアイスクリームの入った袋を下げて水瀬の家に入った。

神社に間借りしているこの家には何度も来ているから、勝手は知っている。

「どうぞこちらへ」

お手伝いさんだろう、割烹着姿の若い女性が、美奈子の顔をみた途端、まあ。という顔をしたこと、奥でドタバタ音がしていること、そして、玄関にあった女物の靴が気になったが、美奈子は全て黙っていた。

「ご主人様、桜井様をお連れいたしました」

「んっ」

涼しげな風がながれる中、水瀬は縁側で寝ころんでいた。

あちこちに巻かれた包帯が痛々しい。

「すぐお茶をお持ちいたします」

案内してくれた割烹着姿の女性が、そういつて二人に座布団を出した。

「あ、おかまいなく」といいつつ、やっぱり美奈子は、この女性と以前、どこかであったように思えてならなかった。

日本髪に映える二本の飾り気のない赤いかんざしが、美奈子の目にはなぜか新鮮に映った。

チリン

冷たい麦茶を飲みながら、とりとめもない話をする二人。

ただ、時間だけが流れている。

入ってきた時のどたばたぶりを含め、ドアの後ろで隠れているアイドル殿は、あとでたっぷり冷やかしてあげることにして、美奈子は気になっていることを水瀬にぶつけてみることにした。

「でね？ 気になることがあったの」

「何？」

「あのオバケのこと」

「—うん」

「なんで私を殺そうとしていながら、あんな悪戯じみたことを」

「ああ、そんなこと」

そばに控えていた先ほどの割烹着の女性が麦茶を継ぎ足す。

「文字通りの悪戯」

「へ？」

「桜井さん、マジメだからね。からかいがあると思ったんじゃない？退屈しのぎだったらしいよ。本人としては」

「じゃ、私、水瀬君にバカにされて、未亜にだまされて、オバケにコケにされたってこと？」

優しい視線で見つめる水瀬が、そつとつぶやく。

「ごくろうさまでした」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6598b/>

怪談話はお好きですか？

2010年10月10日17時48分発行